

興城古城（寧遠城址）紀行

綿貫哲郎

〇はじめに

北京より東北へ約 550 km、万里の
長城最東端の山海関さんかいかんから錦州きんしゅうを結ぶ
遼西回廊りょうせいかいろうの中間地点、遼寧省興城市りょうねいしょうこうじょう
に寧遠城址ねいえんじょうしがある。

明宣徳三年(1428)、遼東都指揮使司りょうとうとしきしし (明

初の遼東地域に設置された軍政機関) の下に

寧遠衛ねいえんえいが置かれ衛城が築かれた。天啓てんけい

三年(1623)に袁崇煥えんすうかんが修築し、紅夷砲こういほう (ポ

ルトガル製の最新式大砲) 十数門を備え付

けたが、これは西上する後金こうきん (後の清朝しんちょう)

軍はばを阻むためであった。同六年(1626)、

袁崇煥は寧遠城を包囲した後金軍のヌ

ルハチしんたいそ (清太祖) を撃退 (ヌルハチにとって

生涯唯一の敗戦であり、敗戦後間もなく死去した)、翌七年(1627)にはヌルハチの後を継いで攻め寄せたホンタイジ(清太宗)を再度退けている。

明代四大古城のひとつに数えられる寧遠城址は、現在では興城古城(こうじょうこじょう)と呼ばれ中国国内から多くの観光客が訪れている。清朝史(しんちょうし)・八旗制度研究(はつき)を専門とする筆者は、近年は興城出身(そだいじゅ)の祖大寿という人物を主な研究対象としている関係で、2010年以降に五度興城を訪れている。一日で見学可能な興城古城の見所について、明清交替期の部分を中心に紹介したい。

○アクセス

興城古城へのアクセスは、北京(ペキン)駅から興城駅まで快速列車で五時間から八

時間、^{しんよう}瀋陽駅または瀋陽北駅から四時間弱から五時間程で到着する。巨大な袁崇煥石像が立つ興城駅前広場より興城古城西門まで、徒歩で五分程である。

一方、高速鉄道を利用する場合は、戦後の日本人引揚者送還で知られる「コロ島」こと^{ころとう}葫芦島北駅が最寄り駅となる。北京駅から三時間半、瀋陽駅または瀋陽北駅から一時間半程で到着するが、葫芦島北駅から興城市街まで直通バスはないので、駅前に溜まるタクシーを使うとよい。興城古城（南門または東門）まで約四十分、値段は70元くらいである。

○フリーチケット ^{トンピャオ}「通票」を買おう

「通票」とは「パス」または「一日フリーチケット」をいう。有料見学場所

では、基本はチケットをその都度購入するが、興城古城では「通票」一枚で
じょうへき しょうこうろ けいりょうとくしふ ぶんびょう
城壁・鐘鼓楼・薊遼督師府・文廟・将
軍府（張学良の部下、郜汝廉の邸宅）・周宅
（民国初期の富豪の邸宅）の六ヶ所（実際は
じょうこうびょう
城隍廟を含めた七ヶ所）に入館できる。

2015年時点では100元だったが、入口の無人化（QRコード読み込みによる自動化）で、2018年11月時点で70元に値下がりしていた。

○城壁（古城牆）と鐘鼓楼

城壁は興城古城（以下「古城」と略称）の主な見所^{みどころ}であるが、乾隆四十四年（1781）に修築されている。城壁は南北822.5m・東西803.7mの正方形に近い形で、高さ10m・土台の広さ6～7m・上の広さ4.5mである。城門は東西南



興城古城の延輝門（南門）
手前は切り取られた甕城

北の四面に、^{しゅんわ}春和門（東）・^{えいねい}永寧門（西）・
^{えんき}延輝門（南）・^{いえん}威遠門（北）が置かれ、こ
れらを結ぶ十字の道が古城内の大通り
となっている。また全ての門に城門楼
と半円形の^{おうじょう}甕城（現在は正面部分を切り崩し
て道路としているが、旧来の入口は90度曲が
った場所にあった。足下の石畳で確認できる）を
備える。紅夷砲や明代兵士の人形が並
べられ、^{えん}袁の一字を描いた鮮やかな旗

がたなびく城壁・城門楼を外から眺めるのは無料だが、登るのは有料である。城壁の上からは、古城の城内や各城門、激戦地となった^{しゅざん}首山が見渡せるほか、そのまま上を歩いて一周することも可能である（2018年11月時点で、登り降りできるのは南門と東門の2ヶ所のみ）。

鐘鼓楼は古城の中心に位置する。三層の楼閣は高さ17m、現在は陳列館となっているが特に参考となる歴史資料はない。ちなみに、鐘鼓楼から東西南北の各門までは、ちょうど一里（約400m）である。

^{そだいじゅせきぼう} ○祖大寿石坊 ・ ^{そだいらく} 祖大楽石坊

古城の南門（延輝門）と鐘鼓楼とを結ぶ道が^{えんきがい}延輝街である。^{りょうねいでんしだい}遼寧電視台の歴史ドラマ『袁崇煥』（1986年）を南門一



祖大寿石坊
奥は祖大楽石坊、さらに奥は鐘鼓楼

帯で撮影したこともあり、延輝街の両側は明清時代の建物が復元されている（現在は土産^{みやげ}土産屋などが立ち並ぶ）。

この延輝街で異彩を放つのが、興城出身で軍閥^{ぐんぱつ}（「祖家将^{そかしょう}」）を率いた祖大寿（南側）と従弟祖大楽（北側）の石坊^{せきぼう}（牌楼^{ばいろう}・牌坊^{はいぼう}とも称される）である。祖大寿の石坊は、崇禎四年（1631）に明朝皇帝から曾祖父以来、四代にわたる忠誠を

讚えられたもので、高さ11m、^{かこうせき}花崗石
で作られている。祖大楽石坊は、同じ
く明朝皇帝より崇禎十一年(1638)に賜つ
たもので、高さ14m、赤色花崗石で作
られている。

^{けいりょうとくしふ}
○薊遼督師府

鐘鼓楼の東側にある。明末の北方を
統括する最高軍政機関であり、天啓二
年(1622)に内閣大学士^{そんしょうそう へいぶ}孫承宗を兵部
^{しょうしよ うとぎよしとくしけいりょう}
尚書・右都御史督師薊遼に任じ、薊遼
督師府を寧遠城に置いたことに始まる。
2015年に訪れたときに開放していた。

^{ふもん}府門の内部は、^{かんが}官衙としての^{だいどう}大堂・
^{こうどう ふくしょうしよ かんぐんしよ りしや かんごく}
後堂・副将署・監軍署・吏舎・監獄が
復元されているほか、寧遠城や明代遼
東を知るための遼東英烈展(遼東で陣没
した明朝高級武官の展示)・薊遼督師府史料



薊遼督師府

展（薊遼督師府の歴史展示）・袁崇煥紀念堂

カントンとうかん こうせいとうけん ふっけんしょうぶ
(広東東莞・広西藤県・福建邵武・遼寧興城・北

京での袁崇煥に関する展示)・明清遼東戦史

館 (かいこくせつわ 清朝開国説話より北京遷都せんとまでの展示)・

明清官服・明清兵器など充実した内容

のものであり、興城や遼西地域りょうせい（遼東の西側）に深く関わる人物を中心に、彼らの果たした歴史的な役割を確認できる展示である。



碑林（興城文廟内）

こうじょうぶんびょう
○興城文廟

古城の南西部に位置する。明宣徳五年（1430）に創建された、中国東北部で最古の文廟である。文廟とは孔子の靈を祀る建物を指すが、碑林や博物館施設が併設されている文廟は少なくない。また名宦祠・郷賢祠には、現地の民に慕われた人物が祀られている。

興城文廟の名宦祠には明代から民国

までの遼西出身者 15 名、郷賢祠には同じく 18 名が祀られており、文献資料で見落としがちな人物が多々いる。以前は位牌と略歴のみの展示であったが、2017 年以降は小さな胸像が加わった。

碑林には明代中期以降の遼西地域の石碑が集められている。寺廟の建立や再建の碑文からは、文献資料とは異なる現地の人物同士の繋がりを知ることができる。このような石碑の多くは、以前は邸宅の敷石に使われていたものが多く、切断の跡が痛々しい。

そだいじゅ ぼ ひ
○祖大寿墓碑（興城文廟内）

碑林の西壁側に説明板のない野積みされた石塊がある。祖大寿の墓は、興城西河近くのそかふん祖家墳にあったが、1974



祖大寿墓碑の石塊（興城文廟内）

年に平地にするため、火薬で爆破され埋められた。2011年に掘り出され、石塊8個が文廟碑林に運ばれた。筆者が2013年に二度目に訪れた時は、碑林の前に無造作に積まれていた。

『(民国) 興城県志』の「鎮国將軍祖大寿墓碑文」には、「惟順治十三年八月十五日，皇帝遣永平府知府羅廷嶼，諭祭故精奇尼哈番品級祖大寿之靈。曰：

惟爾持身敬慎，秉性成老，方且蒙優。
忽焉告殞，爰頒祭葬，用表哀悼，永奠
佳城，靈其來享。歲次己亥三月吉旦立」
とあり、文字が記された3つの石塊に
は「順治十三年八月十五……皇帝遣永
平府知府羅廷……諭祭故精奇尼哈番品
……慎，秉性（「……」は欠損部分）」・「老，
方且……佳城，靈……三月」・「級祖大
寿……優。忽焉告殞……享……吉旦」
とある。紛れもなく祖大寿本人の墓碑
である。近年、カナダトロントのロイ
ヤル＝オンタリオ博物館には、民国期
に北京市海淀区永泰莊より運ばれた祖
大寿の墓と称されるものが展示されて
いるが、祖大寿本人の墓は北京にはな
く故郷の興城にある。カナダにある墓
は、祖大寿の子または一族のものであ
ろう。

ねいえんえきかん
○寧遠駅館

鐘鼓楼せんたくの西側にある。明宣徳年間（1430年代）に建てられ、文書の伝達や官員の往来の中心であった。清代には東巡とうじゆんした4名の皇帝が滞在した場所でもあり、清朝皇帝のレリーフがある。2017年に訪問した際に、明清時代の建物が復元され対外開放されていた。しかし、まだ多くが空き家であり、今後次々と文化施設や商店が入ることで、古城の観光の一翼を担う施設になると思われる。

○おわりに

興城古城は、世界遺産せかいいさんに登録された平遥へいよう（さんせいしょう山西省）、中国歴代王朝の都が置かれた西安せいあん（せんせいしょう陝西省）、熱狂的な三国志ファンを擁する荊州けいしゅう（こほくしょう湖北省）という他

の3つの明代古城に比べると、知名度や交通アクセスが今ひとつである。

しかしながら、「一座寧遠古城，半部明清戦史」と称され、万曆^{ばんれき}四十六年(1618)から崇禎^{すうてい}十七年(1644)におよぶ明清戦争と深く関わった城であることは事実である。袁崇煥はヌルハチからこの城を守り、興城出身の祖大寿と彼が率いた軍閥^{ぐんぱつ}の活躍はホンタイジを悩ませ続けた。その歴史的役割は他の明代古城に決して劣るものではないのである。

中国史史料研究会会報 準備号

2019年5月7日発行

編集

中国史史料研究会

hoc@shigakusha.jp

<https://shigakusha.jp/society/hoc/>

発行・事務局

合同会社 志学社

〒272-0032

千葉県市川市大洲 4-9-2

Tel 047-321-4577 / Fax 047-321-4578

info@shigakusha.jp

<https://shigakusha.jp>

本書の著作権者に無断での複製（コピー・デジタル化など）並びに無断で複製したものの譲渡及び配信する行為については、著作権法上での例外を除いて禁じられています。また、第三者（代行業者など）に依頼して本書を複製する行為は、個人や家庭内での利用を問わず一切認めておりません。

中国史史料研究会会報

準備号

